

“Benito Cereno” ——Melville の人間の孤島——

水 木 慶 子

Melville の “Benito Cereno” は 1855 年 10 月から 12 月まで雑誌 *Putnam's Monthly Magazine* に連載された中篇である。三年前に野心的な問題作 *Pierre* を発表しその背徳的な内容によって大方の読者の支持を失ってしまった Melville は、当時、中・短篇の雑誌掲載に活路を見い出していたと言え、“Benito Cereno” はその中の秀篇と呼ぶべきものである。この作品は 1805 年にスペイン船で実際に起こった事件を下敷きにしたものであるが、今日の読者にとっても十分な魅力を備えている。奇妙なスペイン船の船長や黒人たちの言動が一体何を意味するのか、読者は推理小説に対するような興味に駆られて読み進み、船首が露わになるあの衝撃的なシーンに息をのむのである。が、それと同時に、Melville がこの謎めいた一篇によって何を表現しようとしたのか、一体彼は奴隷蜂起を擁護しようとしているのか、それともその反対なのか、大いに疑問がわくところでもある。

物語は 1799 年のこと、チリの南端近くにある荒涼とした小島サンタ・マリア島の港に停泊中のアメリカ・マサチューセッツ州の海豹猟船が、遙か彼方に正体不明の船の姿を発見するところから始まる。霧に包まれてぼんやりとしか見えないこの船は何の旗も掲げていないようだった。ひょっとしたら難破船かもしれないと考えた船長は救命ボートを降ろすよう命じ、自らボートに乗りこんで見知らぬ船へ近づいていったのである。

さて、このアメリカ船 the Bachelor's Delight 号の船長はその名を Amasa Delano といい、「奇妙なまでに人を疑うことを知らぬ善意の人物」、「いやしくも人間性の中に邪悪な心を嗅ぎつけて己れの警戒心に没入することなどまずなく」、それゆえに「人並み外れて鋭敏かつ正確な知的識別

力」¹⁾を持つとは言い難い人物として紹介されている。そしてさらに話が進むにつれ、彼が「海豹猟船の気楽な家族のような乗組員が作り出す静かな規律正しさ」(“the quiet orderliness of the sealer's comfortable family of a crew”: p. 64) に己れの基盤を置いており、自然を「恵み深い」ものと認識し (p. 115)、神の存在を信じている (“There is some one above.”: p. 92) ことなどが明らかにされてゆく。

やがてボートから見知らぬ船に移った Delano は、この船がスペイン国籍の黒人奴隷輸送船 San Dominick 号であることを知る。船内には多少の白人とそれをはるかに上回る数の黒人がおり、彼らが口々に訴えるところによると、長い風雨に遭遇し水・食料とも底をついたため、熱病や壊血病が猛威をふるい、多くの者が——特に白人が——犠牲になったという。船長の Benito Cereno はまだ年若いスペイン人で、打ち続く災難と心労のためか半病人となっており、見るからに忠実な黒人奴隷 Babo にかしづかれていた。深く同情した Delano は早速ボートを母船に帰し、水と食料を取ってこさせることにした。ところがボートが出発し Delano が見知らぬ船上に一人になるや否や、奇妙な事件が次々と彼の目の前で起きることとなる。まず、黒人少年が白人少年の頭にナイフで切りつけるという事件が起きた。これだけでも Delano には十分驚くべき事件であるのに、その黒人少年は何のともめ立ても受けなかったのである。続いて、客の Delano を放り出して片隅で Babo と密談をしていた Cereno が近づいて来たかと思うと、彼にアメリカ船の乗組員や武装の状態などについてうるさく質問をし始める。そして若い白人水夫の意味ありげな視線……。これには

さすがに人の好い Delano も妙な気分になり、一体この状況をどのように解釈したらよいのか目まいのような疑念の渦を感じ始める²⁾。折しも、San Dominick 号は潮流に乗ってどンドン外海へと流されつつあり、Delano の心の拠り所である母船の姿も今や陸の影に隠れて見えない。

実はこの奴隷輸送船ではしばらく前に Babo を首領とする黒人奴隷たちが反乱を起こし多くの白人を殺して船の指揮権を掌握し、今も船長以下の白人全員を支配下に置いているのであった。そして、Delano をだまして必要な水や食料を手に入れるため、芝居を打っているのである。だが、Delano は持ち前の目に見えるままを信じる性格と、それにもまして、黒人に対する先入観のため、全く真相に気がつかずにいる。

Delano が黒人を動物に近い存在と考えていることは、彼が航壇の下に横たわっている黒人女と赤ん坊を動物のイメージで促えていることから明らかであろう。

His attention had been drawn to a slumbering negress, partly disclosed through the lace-work of some rigging, lying, with youthful limbs carelessly disposed, under the lee of the bulwarks, like a doe in the shade of a woodland rock. Sprawling at her lapped breasts, was her wide-awake fawn, stark naked, its black little body half lifted from the deck, crosswise with its dam's; its hands, like two paws, clambering upon her; its mouth and nose ineffectually rooting to get at the mark; and meantime giving a vexatious half-grunt, blending with the composed snore of the negress.

The uncommon vigor of the child at length roused the mother. She started up, at a distance facing Captain Delano. But as if not at all concerned at the attitude in which she had been caught, delightedly she caught the child up, with maternal transports, covering it with kisses.

There's naked nature, now; pure tenderness and love, thought Captain Delano, well pleased. (p. 87)

この一節では “doe”, “fawn”, “dam's” を始め動物に関係した言葉が目立っている。Delano は黒人女と赤ん坊を動物に近いものと促え、母親が子を愛撫する姿を「優しさと愛情そのものの」「赤裸々な自然」と考える。その他の黒人女もまた彼の目には「女豹のように素朴で」「鳩のように愛情深い」(p.87) ものと写る(不思議なことに豹のどう猛さは彼の意識から抜け落ちてきているようなのである)。このような考え方は一見好意的であるように見えながら、実は黒人は白人より知的に劣るものであり³⁾、「限られた精神の高望みしない満足感」を持ち、それゆえ奴隷という地位に満足し、主人たる白人に対し「紛れもなく劣等なる存在に時として内在する盲目的な愛着心」さえ抱いているのだ⁴⁾という考えを生み出す。このような誤った黒人観に捕われている Delano は黒人をちょうど “New foundland dogs” (p. 100) でも愛するように愛するが、まさかこの「アメリカの犬」⁵⁾が白人と同じ知性と感情を持ちあわせており、白人に対し殺意に至るほどの激しい憎しみを抱いているとは考えも及ばないのである。

さて一方、San Dominick 号の船長 Benito Cereno は閉ざされた石棺のような人物として描かれている。かつては大勢の友人や乗組み員にとり囲まれていたと思われる彼であるが、今や黒人の反乱によってその多くを殺され、わずかな生き残りとも不断の監視によって連絡を断たれてしまっている。以前はにぎやかな展望台に向かって開かれていたと思われるのに今では石棺の如く閉ざされてしまった船長室は他との関係を断ち切られた Cereno の自我の象徴である。

As his [Delano's] foot pressed the half-damp, half-dry sea-mosses matting the place, and a chance phantom cats-paw—an islet of breeze, unheralded, unfollowed—as this ghost-

ly cats-paw came fanning his cheek ; as his glance fell upon *the row of small, round dead-lights—all closed like coppered eyes of the coffined—and the state-cabin door, once connecting with the gallery, even as the dead-lights had once looked out upon it, but now calked fast like a sarcophagus lid ; and to a purple-black tarred-over, panel, threshold, and post ;* and he bethought him of the time, when that state-cabin and this state-balcony had heard the voices of the Spanish king's officers, and the forms of the Lima viceroy's daughters had perhaps leaned where he stood—as these and other images flitted through his mind, as the cats-paw through the calm, *gradually he felt rising a dreamy inquietude, like that of one who alone on the prairie feels unrest from the repose of the noon.* (p. 88)

Delano には分からないが、Cereno は言語に絶するような体験をしているのである。単に多くの白人が殺されたというだけではないのだ。Cereno の最大の友人にしてこの船の客でもあり奴隷のほとんどを所有していた Alexandro Aranda の遺体には（すでに多くの批評家が指摘していることではあるが）cannibalism が行なわれたと思われるのである⁶⁾。しかもその遺骸は白人への無言の警告として今だ船内にあるのだ。そして Cereno 自身は Babo の強靱な意志の奴隷となり役者に仕立て上げられて（“the creature of his [Babo's] own tasteful hands.” : p. 104）芝居を演じることを余儀なくされているのである。他との関係を一切断ち切れ、おそろしい記憶を脳裏に、恐怖に震えつつ、自己の中に閉じこめられて生きねばならない者は己れ自身を苛み食らい尽くしていく以外にない⁷⁾。Cereno は唇を噛みつめを噛み (p. 62), 「常におのが心を苛んでいるように見受けられ」（“…… even as he ever seemed *eating at his own heart,*” : p. 97), 「声は肺臓が半分なくなった者の声のようで」（“His voice was like that of one

with lungs half gone”), 「ほとんど骸骨のようにやせ衰えて」いるのである (p. 62)。彼にはもはや安らかな眠りはない。彼の顔には「最近の心配と不安による不眠の色がありありと現われ」（p. 60), その苦しげな寝床は Ahab の寝床を思い起させる。ただ、形容し難いほどの苦しみをなめた者のみがこのような寝床に横たわるのである。

A torn hammock of stained grass swung near ; *the sheets tossed, and the pillow wrinkled up like a brow, as if whoever slept here slept but illy, with alternate visitations of sad thoughts and bad dreams.* (p. 99)

この結果、彼の魂はすっかり打ちひしがれ（“craven” : p. 78), その体は背骨を抜き去られた者の如くマストによりかからざるをえない (p. 60)。Delano が「何の前触れもなく、また後につづく風もない、いわば絶海の孤島を思わせる亡霊のような」猫足風に吹かれながら、初めて閉ざされた船長室を目にした時感じた「捕えどころのない不安」とは、孤絶し自らを食らい尽くす以外にない閉ざされた自我に対する漠とした恐怖だったのであろう。

さて、話を再び Delano に戻そう。ボートが積んで戻って来た水と食料を全員に分けてやった後、Delano は順風が立つのを待ちつつ Cereno と共に時を過ごす。やがて、待ちかねた順風が到来し、Delano は無事 San Dominick 号を入港させ錨をおろさせることに成功。ところが、さて我が船に戻ろうと船室から階段へと通じるほの暗い廊下の途中まで来た時、船のひびわれた鐘の音が「まるでどこかの刑務所の中庭で処刑の時を知らせる」鐘の音でもあるかのように、「この地下納骨所とも言うべき場所にわびしく響き渡った」のである。それと同時に「以前彼を苦しめた疑念のすべて」（p. 114）が再び彼の心にわき起こって来たのだった。この終日の謎と矛盾は一体何を意味しているのか、「秘かな一撃の前触れ」（p. 115）ではないの

か。階段の上にいる鎖につながれた巨大な黒人 Atufal は実は自分を襲おうと待ち伏せしているのではないだろうか……。だが、次の瞬間、Delano は歯を食いしばり拳を固めて Atufal の脇を通り抜け、無事暗やみから光の中に出た。そして、自分が信じている通りの世界がそこに確かに存在するのを確認してホッと胸をなでおろすのである。ここには Delano が立脚している世界が集約的に表わされている——Delano の光の世界とでも呼ぶべき世界が……。

The Spaniard behind—his creature before : to rush *from darkness to light* was the involuntary choice.

The next moment, with clenched jaw and hand, he passed Atufal, and *stood unharmed in the light*. As he saw his *trim ship lying peacefully* at anchor, and almost within ordinary call ; as he saw *his household boat, with familiar faces in it*, patiently rising and falling on the short waves by the San Dominick’s side ; and then, glancing about the decks where he stood, saw the oakum-pickers still gravely plying their fingers ; and heard the low, buzzing whistle and industrious hum of the hatchet-polishers, still bestirring themselves over their endless occupation ; *and more than all*, as he saw *the benign aspect of nature, taking her innocent repose* in the evening ; the screened sun in the quiet camp of the west shining out like the mild light from Abraham’s tent ; as charmed eye and ear took in all these, with *the chained figure of the black*, clenched jaw and hand relaxed. Once again he smiled at the phantoms which had mocked him, and felt something like a tinge of remorse, that, by harboring them even for a moment, he should, by implication, have betrayed an atheist doubt of *the ever-watchful Providence above*. (pp. 115-116)

まず、この光の世界の基盤を成すと思われる平和と秩序に満ちたアメリカ船(「穏やかな様子で停泊している整備の行き届いた彼の船」とその延長であるボートの姿がある。そして、「他の何にもまして」彼に信頼感を起こさせる恵み深い自然の汚れなき姿があり、彼の目は、きわめてアメリカ人らしく Emerson 的に、この美しい自然から上方へ「アブラハムの天幕から洩れ出る穏やかな光」へと移ってゆき、「絶えず天に坐してご照覧あるはずの神」にたどりつくのである。このような平和と秩序の世界は、Benito Cereno には二度と戻れぬ憧憬の世界であり、彼がこの世界の基盤を成す海豹猟船を熱っぽく見やるのも無理からぬことであろう (“At first, the Spaniard glanced feverishly up, casting a longing look towards the sealer, …” : p. 113).

さらにここで注目すべきは、慎肌づくりや斧研ぎの黒人たちがせつせと仕事に励む姿と「黒人の鎖につながれた姿」(“the black” とは Atufal のことであるが、また黒人全体を表わすものと考えられることもできよう) がこの世界の重要な部分を構成していることである。つまり Delano の光の世界とは奴隷制を容認しその上に立つものであることがさりげなく示されていると言えよう⁹⁾。

さて、ほどなくボートが San Dominick 号の舷門に着き、別れの挨拶をすませた Delano を乗せていざこぎ出そうとした時、思いもかけぬ事件が起きた。Delano を見送るため舷門に立っていた Cereno が突然「舷牆から身を躍らせ Delano の足もとに飛び降りて来た」のである (“… Don Benito sprang over the bulwarks, falling at the feet of Captain Delano ;” p. 117)。これは Cereno が Delano とのコミュニケーションを求めてついに最後の機会をとらえて閉ざされた自我の石棺から躍り出たことを意味する⁹⁾。だが、Cereno が半狂乱になっていたことと、また、彼の後を追って短剣を手にもってボートに飛び降りて来た Babo があたかも Delano の命をねらっているように見えたことから、Delano は彼 (Cereno) を海賊だと勘違いしてしまう。Babo が再度 Cereno を襲おうとするのを目撃して始めて、ようやく Delano は事の次第

を認識するのである。

事が露見したことを見てとった San Dominick 号の黒人たちは船の錨索を断ち切り、外海に逃れようとした。その瞬間、錨索の端が舳を覆っていた帆布に激しく打ち当ってこれを払い除け、人間の白骨が船首像として姿を現わす。これこそ cannibalism の犠牲となった Aranda の亡骸であり、その下には白墨で “Follow your leader.” (「汝らの先導者に続け」: p. 119) と記されてあったのである。

読者には Cereno の供述書の中で初めて明らかにされるのであるが、Aranda が殺害された後、三日間はその遺体がどうなったのか白人たちには分からなかった。そして四日目、日の出に Cereno がデッキに上ってみると、この船の新しい船首像として Columbus の像の代わりに Aranda の骸骨がつるさされていた——Aranda が復活していたのである。明らかにこの下りは処刑後三日目の朝、日の出によみがえったというイエス・キリストの復活を意識して書かれている。では、Aranda はキリストなのか。骸骨の足元近くの頭板に記された “San Dominick” の「一文字一文字が銅釘の錆びの滴りとともに腐蝕し、それが縦縞となって跡を残していた」(p. 58) というイメージはこの印象を強めているようにも思える。というのは、銅釘 (“copper-spike”) はキリストの手足を十字架に打ちつけた釘を、滴り (“tricklings”) はキリストの血の滴りを思わせ、寛大な人物であった Aranda (彼は黒人は従順だと考え足かせをかけなかった—p. 125) が奴隷制の罪を一身に引き受けて十字架にかけられたのだと解釈することも可能だからである。だが、キリストは人類の罪を贖うために己れの罪なき血を流したのであった。そして、血と肉を備えた健全な姿で三日目の朝によみがえったのである。一方、Aranda は寛大だったとはいえ、百六十人もの黒人奴隷を所有していた以上、無垢であったとは言い難く、その罪ある血は錆びの滴りとなって San Dominick という文字を腐蝕させ、白人の大きな罪を贖うことなど出来ない。彼は何としても真のキリストにはなりえず、

四日目に白骨として復活する以外にないのである。

ところで、Babo が骸骨の足元に書きつけた “Follow your leader.” とは一体何を意味するのか。これは “Keep faith with the blacks from here to Senegal, or you shall in spirit, as now in body, follow your leader.” (「ここからセネガルまで黒人に対する誓約を守れ、さもなくば肉体と霊の両方において汝らの先導者の後続くことになるぞ。」: p. 129) の意味であって、「逆らえば Aranda のように殺され cannibalism の犠牲になるぞ」という脅しである。Babo は白人を服従させて自分たちをセネガルまで連れて行かせるために、この脅し文句を毎日くり返したのである。さて、キリストは幾度か弟子たちに向かって “Follow me” と言っており¹⁰、それから考えると “Follow your leader.” はキリスト教の世界においては「キリスト——その愛と自己犠牲のゴスペル——に従え」の意味になるはずである。白人社会に入ってわずか数年という Babo がこの言葉の持つ意味を十分に認識していたとはちょっと考えられないが、たとえ偶然にもせよ、彼はこれを見事に憎しみに満ちた脅迫の言葉へと逆転させてしまったのである。

さて、母船に戻った Delano はすぐさま再びボートを出して San Dominick 号を追跡させた。そして戦闘開始のシーンにおいて、Aranda の骸骨は重要な役割を果たすのである。

With creaking masts, she [the San Dominick] came heavily round to the wind; the prow slowly swinging into view of the boats, its skeleton gleaming in the horizontal moonlight, and casting a gigantic ribbed shadow upon the water. *One extended arm of the ghost seemed beckoning the whites to avenge it.*

“Follow your leader!” cried the mate; and one on each bow, the boats boarded. Sealing-spears and cutlasses crossed hatchets and

hand-spikes.

(p. 122)

ここで、復活した Aranda の骸骨は白人を復讐へと駆り立て（それが説く教えは愛のゴスペルではなく復讐のゴスペルなのだ!）、これを受けてアメリカ船の航海士は“Follow your leader!”と叫び乗船する。今度の“Follow your leader!”は「我に続いて乗船し戦え!」の意味であり、Baboによって脅迫文句とされたこの言葉が、今度は白人による復讐開始の合図となって黒人側に投げ返されたことを意味する。こうして、白人(“sword-fish”:「メカジキ」)と黒人(“black-fish”:「ごんどう鯨」: p. 122)との壮絶な戦いが始まるのだが、しょせん、武器における白人の優位は如何ともし難く、まもなく、黒人を制圧してしまう。蜂起の際の黒人による殺戮もすさまじいものであったが、白人の復讐も凄惨をきわめ、しかもまるで黒人のやり方を踏襲するかのように行なわれたのである¹¹⁾。すなわち、最初蜂起した時に黒人は18人の白人を殺したが、船上での戦いで白人はほぼ同数の黒人を殺す。次に、蜂起後、Baboの命令で黒人側はさらに無抵抗の11人を生きながら海中に投げたが、白人側もまた、San Dominick号を取り戻して港に停泊させた夜、鎖につながれたままの黒人を何人か殺したのである。そして、仕上げとして、黒人がArandaを殺しその骸骨をつるしたように、白人もまた、法の名においてBaboを処刑しその首を晒すのである。だが、このような復讐が如何に空しいものであるかは交戦中に仲間の発砲した弾によって誤って殺された白人が三人もいたという事実によってさりげなく暗示されていると言えよう。

さてここで、この小説の陰の主人公であり非常に興味深い人物でもあるBaboについて考えてみたい。最初は読者の前に忠実な奴隷の仮面をかぶって現われ、後にはCerenoの供述書の中から影絵のように“the helm and keel of the revolt”(「反乱の舵となり竜骨でもあった人物」: p. 134)としての姿を現わすBabo。小柄で見かけは取るに足らない人物ながら、この「竜骨」という言葉から

は彼の強大な自我の力が感じられるのである¹²⁾。

彼の復讐には大きく分けて二つのレベルがあると思われる。その第一はむろん黒人を捕え奴隷とした白人に対する復讐である。彼は“the plotter from first to last.”(「最初から最後までこの陰謀の張本人」: p. 134)であった。すべての殺人を命令したのは彼であるが、しかし、自分自身は一度も手をよごさなかった。また、非常に残虐な行為ながら、自分たちの自由の妨げとなるArandaを殺し(当時、奴隷は主人が活着している限りはたとえ逃亡に成功しても自由の身とは見なされなかった)、その遺体にcannibalismを行い、白人を威嚇するため骸骨を船首像としてつるすという考えには発想の独創性、サディスティックな芸術性すら感じられるのである。そのあとでBaboは白人を集めて熱弁をふるい、あたかも創造主になったかのように「今や自分は一切の事を成し終えた」(“saying that he had now done all ;” : p. 129)と述べた。そして思いもかけず遠くにアメリカ船の姿を認めた時には、やがてその船からの来訪者があることを予測し、わずか二・三時間の間にもっともらしい作り話を考え出し、すべての手を整えたのである。まず、彼はCerenoに何を着るべきか指示し、どのような役割を果たすべきか事細かに教え、自分の右腕である巨大な黒人Atufalにわざと鎖をかけて来訪者の目をごまかすことを考えつき、また、いざという時に備えて凶暴なアシヤンティ族の黒人たちを船尾楼の前端に配置して斧研ぎの仕事をさせ、さらに船上の全員を集めて自分の意図・仕掛けなどについて徹底的に教え込んだのである。実際、Cerenoがボートに飛び込むまでは、Baboは自分が書いた筋書通りにすべての人間を動かしてゆく劇作家、否、創造主になったような快感をあげていたと言えよう。

彼がDelanoの前で演じて見せた芝居の中で最も手が込んでおりそのクライマックスとも言えるものがひげそりのシーンである。ここで、BaboはDelanoを前にしながらCerenoのひげをそってやるのだが、実はこれは象徴的レベルにおけるCerenoの死刑執行であると言える。Baboはまず「処刑の時を知らせるかのような」半時鐘の音を合

図に、Cereno を「栲問器具」(p. 98) の如き理髪用枕つき椅子に座らせ、あごの下にスペインの国旗を掛けてやり（昔スペインの宗教裁判所で咎人に着せた sanbenito—囚衣—を思わせる）¹³⁾、「あごがぴったりとはまり込む柄杓状の窪みのついた」¹⁴⁾ 首受け台に似た洗面器で石けんの泡を塗ってやり、「首斬役人」(p. 101) の如くかみそりをふり上げるのであった。今まさに黒人を奴隷とした罪でスペイン人の代表として Cereno が首を斬られようとしているのだ。そうして、Babo はまるでネコがネズミをいたぶるが如く、Cereno に黒人を称賛させながらその首を剃り始める。これこそ白人にとって最高の刑罰でなくて何であろう。

As if glad to snatch the offered relief, Don Benito resumed, rehearsing to Captain Delano, that not only were the calms of unusual duration, but the ship had fallen in with obstinate currents; and other things he added, some of which were but repetitions of former statements, to explain how it came to pass that the passage from Cape Horn to St. Maria had been so exceedingly long; now and then mingling with his words, *incidental praises, less qualified than before, to the blacks*, for their general good conduct. These particulars were not given consecutively, the servant, at convenient times, using his razor, and so, between the intervals of shaving, *the story and panegyric went on with more than usual huskiness.* (p. 103)

そして、ひげそりが終ると、Babo は櫛と鋏とブラシを持って Cereno の髪を整え始める。その姿はまるで「白い彫像の仕上げに取りかかるヌビア族の彫刻家」(“a Nubian sculptor finishing off a white statue-head.” : p. 104) のようであった。“finish off” に「片づける(殺す)」の意味があることは言うまでもなからう。

さて、Babo の第二の復讐は、第一の復讐に比べるとはるかに比重は軽いものの、それだけにより微妙であり彼の心の奥底をのぞかせてくれるものとなっている。すなわち、それは同胞の Atufal と Francesco に対する象徴的レベルにおける復讐なのである。Babo は故郷の黒人の国においても「貧しい奴隷にすぎなかった」(p. 75) が、Atufal の方は王であった。ここに Babo の心をいら立たせるものがあり、彼は現在の絶好の機会を捕えて巧みな復讐を仕組む。まず Atufal 王を自分の副官とし、続いて来訪者の目をごまかすためと言って Atufal の体に鎖をかけ貶めるのである。Delano が Atufal の高貴な蛮人の相貌に心打たれ、鎖を解いてやるよう Cereno に提案した折に Babo が反対したという事実¹⁵⁾ には実に意味深長なものがある。そして姿形の美しい混血の Francesco に対しては小柄で目立たない Babo は明らかに容貌の点で劣等感を感じていると思われる¹⁶⁾。だが、彼はその Francesco を自らの心服者とし、彼を万事につけ「己れの手先であり道具」(“the creature and tool of the negro Babo ;” : p. 134) とすることによって復讐を果たすのである。

以上のように Babo は己れを縛り貶めるあらゆる力に対し、その「奸智の巢窟たる」(“that hive of subtlety” : p. 140) 頭脳のすべてをもって挑んだのであって、彼の類まれなる統率力、雄大な着想、鋭い知性と細心の芸術性には舌をまかざるを得ない。そして上述のような特性が彼を単なる残酷な復讐者以上のものにしていえるのであり、Melville が Babo をこのような人物に造型したのは、Karcher の指摘にある通り、黒人をあらゆる人種の中で最も劣等なものと考えていた、当時の平均的アメリカ人の頑迷な偏見に対する反発からであったと思われるのである¹⁷⁾。そして、その造型にあたってはハイチの独立に力を尽した黒人の指導者 Toussaint L’ouverture (トウサン・ルベルチュール) ——自ら、ハイチの奴隷の子に生まれながら、優れた知性・指導力・軍事的才能・外交手腕により白人をきりきり舞いさせ、いったんは奴隷を解放することに成功した¹⁸⁾ ——がモデルになっているのではないかと考えられるのであ

る。

だが、Babo がまさに勝利の絶頂にあった時、敗北が秘かに忍び寄る。生まれて初めて知った自由の味、そして、すべてを自分の思いのままに動かす快感に我知らず酔いしれたのであろうか、彼はついにアメリカ船まで手に入れることを考えついたのであった。1799年頃のアメリカと言えば、綿繰器の発明によって南部の綿花栽培が飛躍的に拡大し、ますます奴隷の需要が高まりつつあった。そんな時に、たとえ北部の船であるにしろ、アメリカ船を襲い制圧することは、アメリカ人を罰することになり、また、白人に対する新たな復讐になろう。既に、前述のひげそりのシーンにおいて、Babo は Delano をも「異端尋問所の拷問台さながらに見るもおぞましい骸骨の肋骨めいた長椅子」(p. 98) に座らせているのであって、これは Delano (アメリカ人) を次の犠牲者にするという予告と考えられる。ただ故国セネガルに帰るということだけを考えるなら、水と食料を手に入れてすぐ引きあげた方がはるかに安全であり、アメリカ船襲撃は明らかに余計事なのだが、Babo はこの誘惑に打ち勝てなかった¹⁹⁾。そして、襲撃計画を Cereno にもらしたことが Delano を救いたいという気持ちを彼に起こさせボートに飛び込ませる結果となってしまう。完璧とも言える復讐計画をあと一步のところまで Cereno に水の泡とされ、憤激した Babo は後を追ってボートに飛び込む。そして、今や、自分を圧迫して来たすべての力の化身とも思える Cereno にあらん限りの憎悪を込めて襲いかかるのである。

Glancing down at his feet, Captain Delano saw the freed hand of the servant aiming with a second dagger—a small one, before concealed in his wool—with this he was snakishly writhing up from the boat’s bottom, at the heart of his master, *his countenance lividly vindictive, expressing the centred purpose of his soul*; while the Spaniard, halfchoked, was vainly shrinking way, with husky words,

incoherent to all but the Portuguese.

(p. 118)

さて、次に、事件後、この三者がどのような道をたどることになったかについて述べておきたい。再び白人の手に取り戻された San Dominick 号はアメリカ船と連れ立って、この事件を法廷に持ち込むべくリマに向かうことになったが、その航海の途中、二人の船長はよく仲睦まじく語り合っていた。ところが、注意して二人の会話をたどってみると、実は双方とも自分の殻から一步も抜け出ていないことがわかるのである。まず、Delano であるが、彼もまた非常に重大な体験をしたはずである。この事件における彼の人間認識はことごとく誤っていた。Cereno が海賊などではなかったことは言うに及ばず、白人より劣等であるがゆえに奴隷という身分に満足しているものと思いを込めていた黒人たちの激しい怒りと自由の希求を彼は目のあたりにしたはずである。だが、彼は自分の認識がかくも誤っておりそのために船もろとも危いところであったということを知っても、自分の認識力に根本的な疑問を感じて回りの世界を認識し直そうとするわけではなく、またこれだけの惨劇を目撃しながら奴隷制の是非について考えてみようとするわけでもない。実のところ、彼はこの事件から何らの根本的な影響も受けなかったのである。相変らずアメリカ船の平和と秩序の中に安閑と暮し、特に人間に対して猜疑心を抱くようになったわけでもなく、今なお自然を人間の “Warm friends, steadfast friends” だと信じ、神にゆるぎない信頼を置いている (“all is owing to Providence,” : p. 139)。Melville の世界において人も自然も多く、暗い面を持ち神はひたすら沈黙するものであることを考える時、このような認識はきわめて片手落ちであるとしか言いようがなく、事実、何箇所かにおいてその不十分さが暗示されているのだが²⁰⁾、Delano はそこに平然と留まっているのである。いや、むしろ、不十分な認識の上に立った独善的とも言える生き方に自信を強めてさえいるのだ。というのは Cereno に「貴殿

の命は神が守られたのだ」と言われて、「確かにそうに違いないが、また、私の人の好きや同情や慈善が助けとなったのであり、それに鋭い目がなかったことが（認識が誤っていたことが）かえって幸いしたのだ」と言い放っているからである。

“Yes, all is owing to Providence, I know : but the temper of my mind that morning was more than commonly pleasant, while the sight of so much suffering, more apparent than real, added to *my good-nature, compassion, and charity*, happily interweaving the three. Had it been otherwise, doubtless, as you hint, some of my interferences might have ended unhappily enough. Besides, those feelings I spoke of enabled me to get the better of momentary distrust, *at times when acuteness might have cost me my life*, without saving another's. Only at the end did my suspicions get the better of me, and you know how wide of the mark they then proved.”

(p. 139)

そして、この事件の衝撃から今だ立ち直れないでいる Cereno に向かっては、自分が感じている自然との一体感を押しつけ、「自然の回復力を見習って過去を忘れよ」と忠告する。

“You generalize, Don Benito ; and mournfully enough. But the past is passed ; why moralize upon it ? Forget it. See, yon bright sun has forgotten it all, and the blue sea, and the blue sky ; these have turned over new leaves.”

(p. 139)

これは歴史が浅いゆえに過去の重圧を感じる必要がなく、未来に生きることが出来るアメリカ人ら

しい発言と言えよう。だが、このような考え方が、他人の経験の重さを押し量れず自らの行為を反省しない態度を生み出していることは否定できない。Cereno は力なく答えて言う：“Because they have no memory,” …… “because they *are not human.*” (p. 139). この“they” はもちろん太陽、空、海という自然を指しているのだが、「アメリカ人」とすることも不可能ではあるまい。

さて次に Cereno であるが、彼は事件後どのような心境に至ったのであろうか。Delano とは異なり、彼が自然との一体感をとうに失ってしまっていることは“because they are not human.” という言葉から明らかである。また、彼は「常に変わりなく吹く穏やかな貿易風もただ私を墓場へと送ってくれるだけだ」(p. 139) とも言っている。そして、人間の性に関する彼の発言は深いペシミズムに染められているのである。

“Wide, indeed,” said Don Benito, sadly ; “you were with me all day ; stood with me, sat with me, talked with me, looked at me, ate with me, drank with me ; and yet, your last act was to clutch for a monster, *not only an innocent man*, but the most pitiable of all men. To such degree may *malign machinations and deceptions* impose. So far may even the best man err, in judging the conduct of one with the recesses of whose condition he is *not acquainted.* But you were forced to it ; and you were in time undeceived. Would that, in both respects, it was so ever, and with all men.”

(p. 139)

文中の“malign machinations and deceptions”（悪意に満ちた陰謀や術策）という言葉は明らかに Babo に言及したものであり、Cereno が Babo を完全なる悪としか見ていないことが分かる²¹⁾。一方、一人のスペイン人として、また奴隷輸送船の船長として Cereno 自身にも奴隷制に対する幾

分かたの責任はあったはずなのに²²⁾，“not only an innocent man”の言葉が示すように彼は自らの責任を認めていない。そればかりか、Babo に対するあまりの恐怖からか、事件後彼はかつて自分の「松葉杖」(p. 116)となるほど深い関係にあった Babo に会うことはおろか、その姿を目にすることさえ拒むのである。かくして、Babo を代表とする黒人と Cereno の間には完全な断絶があるばかりである。両者の間には法廷での対決すら実現しないのである。

一方、Delano に対してはどうであろうか。「相手の置かれている状況がよく分からないような場合には、最も善良な人間さえ悪意に満ちた陰謀や術策に欺かれ、相手の真意を見誤るのだ」という Cereno の言葉は、人間の識別能力の限界と同時に人と人との（たとえ白人同士であっても）意思疎通の難しさを述べているように思える。Cereno は一たんは Delano とのコミュニケーションを求めて自我の石棺から躍り出しいくばくかの真実を伝えはしたものの、結局のところ、あまりに住む世界の違う単純なアメリカ人に、cannibalism をも含めてこの事件の最も暗い部分を語ることはできなかったのである。Cereno がどうしても語ろうとしない話題は幾つかあり、「実際、そうしたことについては、彼の以前の無口はさらに徹底したものになった」のであった (p. 140)。かくして彼は Delano に対し再び自我の石棺を閉ざし、耐えがたい記憶とともに自らの中に引きこもらざるを得ない。

“There was silence, while the moody man sat, slowly and unconsciously *gathering his mantle about him, as if it were a pall.*”

(p. 140)

他の白人に対しても事情は大体同じであった。リマに到着後、Cereno は法廷で宣誓供述を行ったが、異様この上ない内容のため、他の生き残り水夫の供述によって真実性が証明されるまでは、容

易に信じてもらえぬ始末であった。彼の体験は語られることを拒むのである。そして法廷を退出後、彼は世の中から身を引き、「苦悶の山」にある僧院に引きこもってしまう。だが、たとえ自分が救出されたことを「神のご加護」と深く感謝はしていても (p. 133)、宗教に慰めを見出すことはできなかったらしく、わずか三ヶ月後には「棺架に乗せられて文字通り彼の先導者の後に続いた」のであった (“Benito Cereno, borne on the bier, did indeed, *follow his leader.*” : p. 140)。これは Cereno が Aranda とは別種の cannibalism の犠牲となったことを暗示している。すなわち、彼は、閉ざされた自我の中で、他人には到底十分には語り尽すことのできない恐ろしい記憶と共に生きるうちについに自らを食らい尽すに至ったのである (“self-cannibalized”)

最後に、Babo はどうなったのであろうか。ポートの中で Delano に取りおさえられ、すべてが終わったことを知った彼はもはや抵抗を試みず、あれだけの雄弁家でありながらその後は一言たりとも発するのを拒否した（白人とのコミュニケーション拒否）。これは、白人側の法廷ではしよせん何を言ってみたところで無駄であり公平な裁判など期待できない²³⁾と彼が悟っているからであろう。読者が彼の雄弁をじかに聞くことはついにないのである。やがて彼はラバの尻尾につながれて絞首台へとひきずられて行き「声なき最期」 (“his voiceless end” : p. 140) を遂げた。だが、何日も広場の柱に晒された彼の首は臆することなく白人たちの視線をにらみ返し、Aranda の遺骸がおさめられている聖バルトロメオ教会、さらには Cereno が息をひきとったかなたの僧院をもにらみ続け、白人への永遠の敵意と無言の抵抗を表わしていたのである。

事件後も依然として第三者的な幸福の中にある Delano。他者との断絶を深め自らを食らい尽す Cereno。そして白人とのコミュニケーションを拒否し、首斬られてもなお永遠の敵意に燃える Babo。あれほど深く互いの運命にかかわり合った三者であるのに、その間には何らの理解も生まれず、ただ深い断絶があるのみである。まことに絶

海の孤島同士のように孤絶し合った人間存在……。Delano が始めて Cereno の船長室を目にした時、「何の前触れもなくまた後につづく風もなく」吹いてきた「絶海の孤島」のような猫足風とは、このようなすべての人間存在の象徴と言えるのではないだろうか。このテーマの萌芽は既に *Moby-Dick* に見られるが²⁴⁾、短編執筆当時の Melville の興味の中心を占めるようになってきたらしく、短編の主要テーマの一つとなっている(例えば“Bartleby”のテーマは、Bartleby と弁護士との間のコミュニケーションの失敗と考えることもできる)。そして、恐るべきは、互いの無理解が生み出す憎しみ合いがどんどん増殖してゆくことである。奴隷制が黒人側の憎しみを呼び、その黒人の復讐が白人側の憎しみを呼んだ。そして、今また Aranda と同じように Babo の首が晒されたのであるから、今度はその首が復讐のゴスペルを説き黒人たちが“Follow your leader!”と叫んで襲いかかって来ることが十分に考えられる。こうして二つの人種間の憎しみ合い・殺し合いが半永久的に続くであろうことが暗示されているのである。そして、本来、「キリストの愛と自己犠牲のゴスペルに従え」の意であるはずの“Follow your leader.”が「殺せ!」という復讐の関の声となって伝えられてゆくとは何と皮肉で恐ろしいことであろう。キリストの教えはあまりに高尚で美しすぎ、人間にはそのまま実行することが不可能なゆえに、この世では変質せずにはいられないということなのであろうか²⁵⁾。このような状況の中でどうして Delano (アメリカ人) だけがいつまでも第三者でいられようか。Amasa Delano と Alexandro Aranda とは注意して見ると実に多くの共通の文字を含む名ではないか。また二人とも寛大な人物であり黒人を見誤っていたことでも一致している。

この問題を考えるにあたり、まず先に、San Dominick 号の船首像として コロンブス像の代わりに Aranda の骸骨がつるされた意味を考えなければならぬであろう。San Dominick とはコロンブスが 1493 年に発見した新世界の島イスパニオラ島の東三分の二の地域(現在のドミニカ共和

国)の旧称であり、それゆえ、その名を持つ船に発見者コロンブスの像がつるされたことは至極当然のことと言えよう。だが、ここはまたスペイン人が始めて新世界に奴隷制をもちこんだ因縁の場所であり、西三分の一にあたるハイチでは 1791 年から 1804 年頃まで前述のルベルチュールが指揮する激しい奴隷反乱が起こっている。それゆえ、San Dominick 号の船首像がコロンブスから Aranda の骸骨に変えられたということは、コロンブスが尖兵となったヨーロッパの拡張運動——帝国主義的な植民地獲得運動——が黒人を始めとする異人種とヨーロッパ人との間に激しい憎しみ合い・殺し合いを招いたことを意味するものと考えられる。

さて、骸骨をぶら下げたこのスペイン船が出会ったのはアメリカ船であった。アメリカ船の船長は色々とスペイン船を助け、そして別れぎわに黒人 Babo によって支えられている Cereno と、Babo (二人を引き離そうと躍起になっている!)の体ごしに握手をかわすのである。

Meantime, as if fearful that the continuance of the scene might too much unstring his master, *the servant seemed anxious to terminate it.* And so, *still presenting himself as a crutch, and walking between the two captains,* he advanced with them towards the gangway; while still, as if full of kindly contrition, Don Benito would not let go the hand of Captain Delano, but retained it in his, *across the black's body.* (p. 116)

この握手は Cereno (スペイン——ヨーロッパ) から Delano (アメリカ) への引き継ぎの儀式であると考えられる。すなわち、拡張運動とその所産とも言える奴隷制(拡張運動は植民地での多くの労働力を必要とした)が、黒人の犠牲のもとに、憎しみ合い・殺し合いを必然的に伴いながらアメリカに引き継がれていくことの象徴である。

こうしていわばヨーロッパの遺産を引き継いだアメリカは、黒人に犠牲を強いつつ、やがてヨーロッパを凌ぐ強力な勢力にのしあがっていく。次のシーンで、ボートに飛び込んで来た Cereno と Babo を引っ捕え組み伏せたまま前進する Delano の姿は、来たるべき “New World imperialism”²⁶⁾ の予告である。

At this juncture, the left hand of Captain Delano, on one side, again *clutched the half-reclined Don Benito*, heedless that he was in a speechless faint, while his right foot, on the other side, *ground the prostrate negro*; and his right arm pressed for added speed on the after oar, *his eye bent forward*, encouraging his men to their utmost. (p. 118)

とすれば、Delano がいとま乞いをする前に San Dominick 号で Cereno と共にした昼食のシーンも新たな意味あいを帯びて来ることになる。昼食中に突然 Cereno は自分の前のテーブルに置かれた Babo の手（「壁に描かれた手のように無言の」とある—— p. 109）に、Belshazzar 王の宴を中断し壁に王国の運命を予告した手を見て震え始める²⁷⁾。Daniel 書によれば、神は Belshazzar 王の傲慢さと物質主義（金、銀、青銅、鉄などの神々をあがめたこと）を怒られ、王として力量の足りない者と断罪され、その治世が終り王国が分裂することを壁文字で予告されたのであるが（Daniel 書の五章）、この断罪と王国分裂の予告は、ひとり Cereno（ヨーロッパ人）のみならず Delano（アメリカ人）にも向けられているのではないだろうか。つまり、アメリカは傲慢にも黒人の犠牲のもとに繁栄を追求しているのであり、もしこのままその犠牲を無視して前進し続けるなら、必ずや分裂の危機に見舞われるという警告なのではないだろうか。

Melville がこの作品を発表した 1855 年当時の一般的アメリカ人は、善良で敬虔なる同胞 Delano

の大活躍を喜んだかもしれない。だが、実のところ、Delano は愚者の幸福の中に安住して己れの運命を悟らない愚かなアメリカ人なのである。彼の光の世界の基盤となっているアメリカ船は繰り返し “the sealer” と呼ばれている。これはもちろん「海豹猟船」の意味なのだが、“seal” には「（目を）堅く閉じる」の意味もあり、“the sealer” は「歓迎できない真実に目を閉じてしまう者」と取れないこともない。また、the Bachelor’s Delight という名そのものが「愚者の幸福は危険」というメッセージを伝えているように思われるのである。というのは、この名は *Moby-Dick* で Pequod 号が出会う二隻の船の名（the Bachelor と the Delight）の合成であるからである。前者は大漁にわきかえる船で、恐るべき白鯨の存在など一向に信じず、さかんに Ahab に来船し宴に加わるようにすすめ、彼に “How wondrous familiar is a fool!”（「馬鹿とは何と気前がいいものだ」：p. 489）とつぶやかせる。後者は「いたましくも名前負けのした」船であり（p. 531）、白鯨に屈強の乗組み員を五人も殺され、その葬儀の最中であつた。この二隻の船の持つ寓意をつなぎ合せると「愚者の幸福は危険——死につながる」となるのである。the Bachelor’s Delight にもいつ San Dominick と同じ不幸がふりかかるか知れたものではないのである。

この作品は己れを待ち受けている運命を悟らずに盲目的に進んで行こうとしているアメリカ人に対する警告であると言える。当時のアメリカは、とても白人が白人に向かって “black equality” などという言葉を出せないような状況であり²⁸⁾、まして Melville は「一般読者の上品な感受性のデリカシーを何にもまして重んじる」²⁹⁾ Putnam’s 誌に執筆していたのであって、彼は慧眼な読者だけに自分の意図が伝わるよう試みたものと思われる。時に 1855 年、アメリカを二分する南北戦争の火ぶたはあと八年後に切って落とされる運命にあつた。

注

- 1) Melville, *Piazza Tales*, ed. Egbert S. Oliver (New York : Hendricks House, Inc., 1962), p. 55. 以下, “Benito Cereno” からの引用はすべてこの版によるものとする。また, 引用文中の断りのないイタリック体の使用や [] 内の書き入れはすべて筆者による。
- 2) “Ah, these currents spin one’s head round almost as much as they do the ship.” (p. 87)
- 3) “Was it from foreseeing some possible interference like this, that Don Benito had, beforehand, given such a bad character of his sailors, while praising the negroes; though, indeed, the former seemed as docile as the latter the contrary? *The whites, too, by nature, were the shrewder race. A man with some evil design, would he not be likely to speak well of that stupidity which was blind to his depravity, and malign that intelligence from which it might not be hidden? Not unlikely, perhaps. But if the whites had dark secrets concerning Don Benito, could then Don Benito be any way in complicity with the blacks? But they were too stupid.*” (p. 90)
- 4) “When to this is added the docility arising from *the unaspiring contentment of a limited mind*, and that susceptibility of *bland attachment sometimes inhering in indisputable inferiors*, one readily perceives why those hypochondriacs, Johnson and Byron—it may be, something like the hypochondriac Benito Cereno—took to their hearts, almost to the exclusion of the entire white race, their serving men, the negroes, Barber and Fletcher.” (p. 100)
上の引用部分に表われている考え方は直接には語り手のものであるが, Delano の考え方とも符合し, それを代弁していると考えられる。
- 5) Newfoundland は New-found-land ともとれるのである。William D. Richardson, *Melville’s “Benito Cereno”: An Interpretation with Annotated Text and Concordance* (Durham: Carolina Academic Press, 1987), p. 219 参照。
- 6) 例えば “the deposition” (宣誓供述書) の中の次の一節は cannibalism が行なわれたことを強くにおわせている。 “... that Yan was the man who, by Babo’s command, willingly prepared the skeleton of Don Alexandro, in a way the negroes afterwards told the deponent, but *which he, so long as reason is left him, can never divulge;*” (p. 134). “prepare” が食事に関連のある語であることは言うまでもない。
- 7) “And in the end Benito Cereno, so fearful of being the victim of cannibals, is self-cannibalized.” William B. Dillingham, *Melville’s Short Fiction 1853-1856* (Athens : The University of Georgia Press, 1977), p. 242 参照。
- 8) Delano が心の底では奴隷制を容認していることは, San Dominick 号の船上で彼が偶然に黒人奴隷に突きとばされた時, 思わず権威を振りかざして黒人に控えるよう命令を放ってしまうシーン (pp. 94-95) から推察できる。つまり, 彼は一見黒人に好意的な態度を取りながらも, 黒人が奴隷としての分を超える (既成の社会秩序を無視する) のは気に入らないのである。
- 9) 同じようなシーンがほぼ同時期に書かれた “The Encantadas” の第八話にも登場する。荒涼とした小島に亀獲りに行き, 不慮の事故で同行の夫と弟を失い, 迎えに来るはずの船には見捨てられ, 何ヶ月も一人で島の過酷な暮らしに耐えた末にやっと救出された寡婦 Hunilla は, 己れの魂の深淵を人に見せることをいさぎよしとしないが, ただ一度だけ自己の殻から躍り出てその苦しみを伝えようとするのである。
‘*She but showed us her soul’s lid, and the strange ciphers thereon engraved; all within, with pride’s timidity, was withheld. Yet was there one exception. Holding out her small olive hand before her captain, she said in mild and slowest Spanish, “Señor, I buried him;” then paused, struggled as against the writhed coilings of a snake, and cringing suddenly, leaped up, repeating in impassioned pain, “I buried him, my life, my soul!”*’
Piazza Tales, pp. 184-185
- 10) 例えば “And he [Jesus] saith unto them, Follow me, and I will make you fishers of men.” (Matthew 4 : 19) “If any man will come after me, let him deny himself, and take up his cross, and follow me.” (Matthew 16 : 24)
- 11) Dillingham, p. 237 参照。
- 12) 背骨を抜き去られてしまったような Cereno とは実に対称的である。
- 13) John Seelye, *Melville : The Ironic Diagram* (Evanston : Northwestern University Press, 1970), p. 109
- 14) “They have a basin, specifically called a barber’s basin, which on one side is scooped out, *so as to accurately to receive the chin*, against which it is closely held in lathering;” (p. 101)
- 15) ““No, no, master never will do that”, here murmured the servant to himself, “*proud Atufal must first ask master’s pardon.*”” (p. 75)
- 16) On their way thither, the two captains were preceded by the mulatto, who, turning round as he advanced, with continual smiles and bows, ushered them on, a display of elegance *which quite completed the insignificance of the small*

bare-headed Babo, who, as if not unconscious of inferiority, eyed askance the graceful steward.

(p. 105)

- 17) Carolyn L. Karcher, *Shadow over the Promised Land; Slavery, Race, and Violence in Melville's America* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1980), p. 128
- 18) Toussaint L'ouverture (1749-1803) 彼はいったんはイスパニオラ島全島を黒人の手中に収めたが、その後、島の再征服を図るナポレオンの妖計により逮捕されアルプス山中で獄死(この点でも Bobo に似ていると言える)。だが、彼の遺志を継ぐ人々によってやがて島の完全独立が達成されることとなった。
- 19) これを Babo の人間的弱さと考えることも出来るであろうが、また、セネガルに帰ってもひょっとしたらもとの奴隷の身分にもどるだけかもしれないという考えが彼の頭をかすめたのかもしれない。
- 20) 例えば、Delano の目に「女豹のような素朴で」「鳩のように愛情深く」「優しさと愛情そのものの」「赤裸々な自然」と写った黒人女たちは宣誓供述書においては残虐な面を露にしている：“…that, had the negroes not restrained them [the negresses], they would have tortured to death, instead of simply killing, the Spaniards slain by command of the negro Babo;” (p.135). つまり、Delano は少くとも人間の中の「自然」には見事に裏切られているわけである。それからまた、Delano よりはかなり精神的に Melville に近い位置にいると思われる語り手は、次の二ヶ所で人間に対する自然の無関心と神の沈黙をそれぞれにおわせている。
“Meantime the sound of the parted waters came more and more gurglingly and merrily in at the windows; as reproaching him [Cereno] for his dark spleen; as telling him that, sulk as he might, and go mad with it, nature cared not a jot; since, whose fault was it, pray? But the foul mood was now at its depth, as the fair wind at its height.” (p. 113)
“But the Spaniard, perhaps, thought that it was with captains as with gods: reserve, under all events, must still be their cue.” (p. 64)
そして極め付きは、San Dominick 号の乗客で、つつがなく航海を終えられた暁には感謝の証として、リマの聖母マリアの祭壇に奉納しようと宝石を身につけていた Don Joaquin なる人物が、交戦中にアメリカ人の勦違いにより撃たれ死亡した (pp. 136-137) という設定であろう (神の不在を暗示)。
- 21) また、彼は Babo のみならず、船上のすべての黒人

をも悪と断定している：“But …… Don Benito entreated the American not to give chase, either with ship or boat; for the negroes had already proved themselves *such desperadoes*, that, in case of a present assault, nothing but a total massacre of the whites could be looked for.” (p. 120)

- 22) 例えば、次のような部分において Melville は Cereno の責任をおわせている。
“Don Benito restored, the black [Babo] withdrew his support, slipping aside a little, but dutifully remaining within call of a whisper. Such discretion was here evinced as quite wiped away, in the visitor's [Delano's] eyes, any blemish of impropriety which might have attached to the attendant, from the indecorous conferences before mentioned; showing, too, that *if the servant were to blame, it might be more the master's fault than his own, since, when left to himself, he could conduct thus well.*” (p. 84)
- 23) Melville 自身も、宣誓供述書の中に黒人の発言を一言も入れなかったことにより、Babo のこの考えを支持しているように思える。Richardson, p. 86 参照。
- 24) “Each silent worshipper seemed purposely sitting apart from the other, as if each silent grief were *insular and incommunicable.*” *Moby-Dick or, The Whale* (New York: Hendricks House, 1962), p. 34
- 25) *White-Jacket* にも、キリストは「単なるこの世の人」ではなかったのであって、その福音は「天の知恵に満ちてはいたが」、「地上の実践的知恵に欠けているように思われる」とある。
Melville, *White-Jacket or the World in a Man-of-War* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1970), p. 324
- 26) Marvin Fisher, *Going Under: Melville's Short Fiction and the American 1850s* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1977), p. 111
- 27) Karcher, p. 136
- 28) Richardson, p. 70
- 29) 杉浦銀策, 「『メルヴィル中短篇集』とその伝記的背景」(「乙女たちの地獄II——H・メルヴィル中短篇集」, 国書刊行会, に収録), p. 265

尚, “Benito Cereno” よりの引用文の訳については, 上の杉浦銀策氏訳を一部参考にさせて頂いた。